

金沢地方裁判所 御中

意見陳述書「能登に生きるために」

原告 落合 紅

私は能登半島の先端珠洲市で生まれ、今も珠洲で暮らしています。実家は浄土真宗大谷派の寺院で、私は副住職をしています。

私が子どものころ、珠洲に原発を建てる計画がありました。地元住民の根強い反対と日本経済の衰退により、平成15年に計画は凍結になりました。私は原発建設に反対をする家に生まれ、両親が反対運動をする姿を見ながら育ちました。

毎晩、大人たちが集まって遅くまで話し合いをしたり、原発反対を訴えるチラシを作っていたのを覚えています。当時は推進派と反対派に分かれて、町が二つに割れてしまいました。子どもだった私たちにも大いに影響があり、学校の中でも、「あの子の家は推進だから誘わないでおこう」とか、「あそこは反対だから仲良くしよう」とか、それまで仲良くしていた友達とギクシャクしたり、珠洲に住む高齢者から子供までが都会の利権に巻き込まれました。

嫌がらせの無言電話も毎晩続きました。私の家は寺院なのでいつ死去人案内が来るかわからず、今のように番号通知や非通知着信拒否もできない時代だったので、ひと晩中電話が鳴りっぱなしでした。

ある時期、家族の誹謗中傷が書かれた「怪文書」が全国至る所の消印で届いたことがありました。中には、私が妊娠中絶したという、身に覚えのないものもありました。母が激怒して、当時珠洲市内にあった北陸電力の事務所に止めるよう抗議に行きました。責任者の方は「知らない」と言っていましたが、母が「あなたの家族の住所を調べて、ご近所の方に私の実名入りで、『この家のご主人はこんなことをしている』と、この怪文書のコピーと私のお手紙を郵送しますが、いいですか？」と言ったら、その後、怪文書はピタリと止まりました。

珠洲原発は北陸電力のほか、中部・関西電力と3つの会社が進めていたので、どの会社がやったのかはわかりませんが、「大手の電力会社の人、いろんな業種の方と懇意にしているんだな」と、当時高校生だった私にはとても良い社会勉強になりました。

令和6年の元日に能登半島地震が起りました。地面は割れ、道路は裂け、下水管は突き出し、家は倒壊し、電信柱は傾き、山は崩れ、海岸は隆起しました。住み慣れた街は瓦礫の山となりました。

珠洲原発の計画があったころ、有識者の方が「能登半島には活断層が無く、大きな地震

の心配はない」とおっしゃっていたはず。そんな所でとんでもない大地震が起こり、たくさんの被害が出て多くの方が亡くなりました。

元日は私も珠洲の自宅におり、うちの境内で家族と共に被災しました。今まで体験したことがない長く大きな揺れで、つい10秒前に通ってきたお寺の門は、目の前で砂埃をあげて倒壊しました。電信柱が大きく揺れて自分たちの方に倒れてきそうで、「今回ばかりは無事ではすまないかもしれない」と自分と家族の身を案じました。

程なくして、防災無線から大音量で「大津波警報です。避難してください！」と繰り返して流れました。私は外れて割れた玄関扉の隙間から防災バッグとヘルメットを取り出し、子どもたちと犬を連れて避難所に指定されている小学校に走りました。倒壊した家屋が道を塞いでいて、回り道をしながら瓦礫の隙間を縫って、なんとか小学校に辿り着きました。

学校に着いても、中にはすぐには入れませんでした。学校の鍵を管理している公民館長が家具の下敷きになっていたのです。1月の寒空の中、グラウンドで2時間ほど、大きな余震に耐えながら鍵を待ちました。中に入れたころには真っ暗になっていました。

この時、珠洲原発が建たなくて良かったと心底思いました。止めてくれた両親や反対派の人たちに心から感謝しました。

原発災害時の初動は、屋内退避と外気の遮断です。もし原発が建っていて事故が起これば、周りには潰れた家が多く、かろうじて建っている家も窓が割れたり、壁が壊れていたり、家が歪み戸が閉まらなくなると外気を遮断できません。また繰り返す余震で壊れかけた家の中にいるのは危険で、安心して居られなかったはずです。避難所にもすぐには入れなかったのも、私たちは学校のグラウンドで全員被曝をしていたと思います。実際、避難したグラウンドでは「原発なくてよかったね」との声も聞こえていました。

想定外のことが起こるのが災害で、避難計画通りには何も進まないのが現実です。この国は福島での原発震災を経験しながら、未だに大地震と原発災害が同時に起こることを想定した避難計画を真剣に考えていません。その事実を知った時は驚きと共に背筋が凍りつきました。

能登半島には主要な道路が1本しかなく、その道路が激しく壊れ、陸路での救援は自衛隊ですえすぐには来ませんでした。海路も海岸が隆起して船が陸地に近づけず、空路もし原発が事故が起きていたら、対策なく近づけなかったのではないのでしょうか？

瓦礫に生き埋めにされていた方々の救助も遅れたと思うし、支援物資もボランティアの方々の到着や活動にも大きく影響したはずです。

1月6日に子供たちを埼玉県の親戚宅に避難させるために、決死の覚悟で車で金沢に向かいました。道路は裂け、車が道ごと落ちています。崩れた土砂の下敷きになっている車の

横をすり抜け、通行止めや回り道を繰り返し、普段は2時間で行く道を10時間以上かけてなんとか金沢に辿り着きました。

能登は半島です。奥能登から出るためには、必ず志賀原発の近辺を通らないとどこにも行けません。志賀町の原発に何かあると、もしかしたら志賀町周辺の住民より被害を受けるのは私たち奥能登に住む者なのかもしれないと気がつきました。

もし、珠洲原発が建っていて事故を起こしていたら、志賀原発が稼働していて放射能漏れを起こしていたら、果たして私たちは無事に能登半島から出られたのでしょうか？出してもらえたのでしょうか？そして、放射能に汚染されているかもしれない私たちを、みんなが不安なく受け入れてくれたのでしょうか？自分が汚染されているかもしれないのに、気兼ねなく大切な子どもや孫のいる場所に避難できたのでしょうか？

私たち奥能登の人間が安心して暮らして行くためには、志賀原発があってはいけないのだと能登半島地震で痛感しました。地震後に志賀原発の差止めを求める裁判を知り、傍聴に来て、第三次原告団に加わりました。

今、私は復興のまちづくりに関わっています。当時反対運動をした家に育った私のことを頼りにしてくれる方々がいます。皮肉なことに、当時推進していた人から「まさか国が推奨している計画が間違っているはずがないと思っていたが、福島事故を見たら自分が間違っていた。もう少しで故郷を失うところだった」、「震災復興計画の中に、原発のような恐ろしいものが入っていても自分は気づかないかもしれないから判断をお願いしたい」と言われました。

その思いを背負い、原発立地のような暴力的に大きなプランではなく、商店街の朝市の復活や、盆踊りの開催、地道な復興に日々尽力しています。

7月28日に熊本地震が起こりました。能登半島地震と同じく最大震度7です。10年前の地震の割れ残りということですが、能登半島地震でも佐渡方向に割れ残りがあるとのこと。志賀原発周辺でも次の大地震リスクが高まっていると専門家は指摘しています。心配で仕方ありません。

普通に安心して暮らしたい。原発に放射能に脅かされない日常を1日でも長く続けたい。そして、不安なく子供たちに能登に帰ってきてと言いたい。この先も能登を誇りに生きていきたい。これからも能登に安心して住み続けるために、私は原告になりました。

裁判所におかれては、一刻も早く志賀原発の運転を差止める判決を出してくださるようお願いして、私の陳述を終わります。